

高槻支援学校の子どもたちから学んだこと

大阪府立高槻支援学校 藤井勉

1. はじめに

報告者の自己紹介とプロフィールとして

○前任校について

- ・前任校の中津支援学校は肢体不自由校で、親元を離れて大阪府立整肢学院に入院している子どもたちへの教育を行っている。
- ・肢体不自由で身体的介助を必要とする子どもたちのため、時間的なゆとり、ゆったりした時間の流れを大切にした教育課程が組まれている。
- ・子どもたちの中には、保護者が育児困難となって措置され入院しているケースも多く、自宅に帰る（外泊）ことができない子も多くいる。
- ・施設という生活環境なので、プライバシーの維持が難しい。
- ・一見、子どもたちの表情は明るく、活発にしているように見えるが、以上のような生活環境から、親との肌と肌とのスキンシップ、愛情に飢え、自らも気づかぬうちに、そうした自分の感情を抑え、我慢している。
- ・子どもたちには、いつしか大人の表情・感情を敏感に読み取る力がつく。
- ・自分の気持ちをストレートに伝える・表現することが苦手。避ける。

教師は、子どもの内面を理解し、見えるようになるまで時間がかかる。

○高槻支援学校に転勤して

- ・校種が、肢体不自由から知的障がい変わった事で、子どもたちの動きの早さ活発さ、時間の流れの早さに最初は戸惑った。何よりも子どもたちにとってつまらない・興味がない授業をすると、自分の前から子どもたちはいなくなってしまう。
- ・教室間移動が多く、時間通りに次の授業へ行く事が、当然のように子どもたちに求められる。授業担当者も授業によって、次々と変わる。
- ・連絡帳を書きながらでも、教室を出て行こうとする生徒に気づかないといけない。
(自分の視野の狭さ・注意力の無さを痛感した。)
- ・1学期が終ろうとする頃、ようやく子どもたちの動きが自分なりに見えるようになる。

子どもの特性が違っても、内面の複雑さ繊細さは、前任校の子どもたちと共通している。

2. 子どもたちから気づかされたこと（事例より）

- 事例1：集団の中にはいる事、活動する事が不安で、その不安を教師にうまく伝えられず、つつい反動的な態度をとってしまう中学部3年生の男子Aくん

【Aくんのようす】

- ・周りに反動的な態度をとり、大きな集団（体育館など）の授業に参加しようとしなない。
- ・参加を促されると、暴言をはいたり、暴れたりする。

【私の対応】

初めの頃は、生徒の行動の理由が理解できず、行動に対して叱ったり、力づくで授業に連れて行ったりしてしまった。同僚から「〇〇くんは、大きな集団が苦手で、本当はものすごく不安なんやと思う。」と聞かされ、「あっ！しまった。何で気づかんかったんや！」と大反省。ある日、同じように体育館に行けず、教室にいるAくんを膝の上に座らせ、「体育館苦手なんや？俺も一緒にここにおるわ。」とギュッと抱きしめる。

【Aくんの変化】

私との関係が深まり、しんどい事、不安な事も伝えてくれるようになり、自分から授業に参加しようとする気持ちを持つようになる。教師と一緒にいく時、手を握っている事で体育館へも安心して入り、授業に参加できるようになる。

子どもの行動・言動には、必ず理由があり、行動・言動に直接アプローチする前に、その理由を理解しよう・見つけようという気持ちを忘れてはいけない。叱る前に、先ず理由を考えるゆとりを持って、それから指導する。



子どもを「叱る」必要はほとんど無い

○事例2：掃除機が大好きで、小学校の時は、「20分休みの時だけ！」と指導されて、何とか学習に臨んでいた。中学部1年生の男子Bくん

【Bくんのようす】

- ・もともと「もの」に対する強いこだわりのある生徒で、特に掃除機に対して強い興味関心を持っている。
- ・掃除機で遊んでいると、他の事に気がまわらず、気持ちを切り替えることが難しい。
- ・母親から「この学校は、至る所に掃除機がありますね！」と不安を訴えられる。

【私の対応】

- ・教室にBくん専用の掃除機を置いて、朝の生活・昼休み・休憩時間全ての時間に、自由に掃除機で遊ばせ、そのようすを見守った。（とにかくやりきらせる！満足・満たす！）
- ・教室内の掃除機の置き場所を定め、出す時、直す時、修理する時もBくんと一緒に行った。（「掃除機はあそこにある！いつでも使える！」という安心感）
- ・自分で気持ちを切り替えて掃除機を片付け、授業に臨んだ時は思いっきり行動を認め、褒めた。

【Bくんの変化】

- ・毎日Bくんが掃除機を引っ張って校内を散歩に出かけるので、いつしかクラスの数名の友だちまでが、一緒に校内を散歩するようになる。みんなで掃除機を引っ張って歩く姿は、まるで仲の良い友だち同士で、子犬を散歩させているようにも見えた。
- ・掃除機を仲介として、友だちとの関係が日に日に深まる。友だちから「そろそろ授業やで、教室帰ろう！」と促され、素直に帰ってくるようになる。そのうち、友だち用の掃除機も加わり2台の掃除機を散歩に連れ出す仲間たち。

- ・子どもたちだけで散歩に出かけ、時間になれば帰ってくるようになる。
- ・1学期中は、掃除機散歩が毎日続いたが、2学期に入り学習発表会の取組が始まり、徐々に掃除機を散歩に連れ出さない日がでてきた。友だちとの豊かで深い関係はクラスの雰囲気まで変え、そのまま学習発表会の練習に引き継がれていく事になった。

「ダメ！」の前に、理解し認める事。時にはやりきらせる事（満足させる事）、子どもが前にある目的を達成することを待つ。

そして、次の行動へ自ら気持ちを切り替える経験を繰り返し積む事。その行動を肯定し、認め、褒める事。（自己肯定感）



子どもが自ら選択し決定した行動を肯定し認め褒める機会をつくるべし

- 事例3：授業を途中で抜け出して、砂遊びに没頭してしまう中学部1年生の男子Cくん
保護者との連携・理解・支援の観点から

【Cくんのようす】

- ・砂遊びが大好きで、乾いてさらさらの砂を砂時計が落ちるように落として遊ぶ。
- ・時間を問わず、授業中であっても衝動的に砂の所へ行って遊んでしまう。

【母親のようす】

- ・小学校時代は、そんなCくんへの対応を担当から求められ、強く叱って授業に臨むよう促してきた。担任から常に「お母さんどうしたらいいですか？」とCくんへの指導について親としての応えを求められてきた。母親は常に、Cくんについての説明をし、彼を理解することを周囲の大人へ訴え続けてきた。彼の行動は、全て母親の責任として重くのしかかっていた。

【私の対応】

- ・Cくんの所属するグループの「職業」を担当することになった。職業教室は、運動場のプレハブ校舎で、ちょうど出たところに、運良く（運悪く？）Cくんの好きなさらさらの砂がある。当然、Cくんは授業前、授業中を問わず、砂遊びに夢中になる。
- ・職業教室のドアを開けたまま、Cくんが砂に向かう事はとめず、Cくんの作業の順番になった時に「Cくん、鋸で木、切るで！」と声をかけて、気持ちを切り替えるように促した。砂遊びで ある程度満足したCくんは、意外とスムーズに気持ちを切り替えて、作業に臨んでくれた。
気持ちを切り替えて作業に臨んだCくんを心から褒めた。
- ・徐々に作業の量と質、そして砂遊びの頻度のバランスを調整するだけ・・・。
- ・「授業は教室で・・・」という観念にとらわれない。

《母親へ》

- ・授業参観で、砂遊びをしているCくんを叱ろうとしたお母さんに、「Cくんにとっては、今これが必要なんです。少し見ていて下さい。直ぐに気持ちを切り替えて作業してくれますから！」「自分のしたい事から、作業に臨む気持ちを大切にしましょ！」

【Cくんの変化】

- ・行事の前後や体調の悪い時には、こだわりが強くなり砂遊びに夢中になる時間が長くなる事はあったが、徐々に教室内で過ごす時間が増え、砂遊びをしなくても授業に取り組める日が増えた。
- ・砂遊びをしても、「次は、Cくんやで！入っただけ！」と教室から声をかけるだけで、自分で気持ちを切り替えて、作業に臨めるようになった。
- ・母親が見ている前で、しっかり自分で気持ちを切り替えて作業に臨んだ。
- ・家庭での両親の関わり方の変化と共に、こだわりの行動が減り、気持ちを切り替えることがスムーズになってくる。

【母親の変化】

- ・「お母さん、どうしたらいいですか？」と対応を聞かれるのではなく、「お母さん、〇〇だから、△△してください。」とCくんについて、言われたのが初めてで、何も言わなくても、子どもを理解してくれている事への驚きと、安心感を持たれた。
- ・これまで自分がCくんにとって良かれと思っていた事が、実は違っていた事に気づく。
- ・家庭でのCくんへのかかわり方が変化。父親も同様に変わり始める。
- ・自分が「何とかしなければ！対応しなければ！」という思いから、「先生に任せよう！」という気持ちに変わる中で、子育てに対する重圧感が和らぎ、待つ事・見守る事ができ、Cくんの行動を理解し認められるようになる。

保護者の心に寄り添い、子どもと共に理解する取組が、子どもの成長・発達を支える事になる。保護者との密なつながりと信頼関係を大切に……。周囲のかかわり方、働きかけ方が変われば、子どもは変わる。子どもの行動を、障がいのせいにはしない。



保護者と共に子どもを理解せよ！親が変われば、子も変わる！

3. おわりに

失敗経験、叱られる経験、自己を否定される経験を積み上げてきた子どもたちにとって、自ら選択・決定した行動を周囲の者から受け入れられ、認められ、褒められる経験が大切な事は誰もが思う事です。となれば、学校において子どもの良いところを見つけて褒めるだけではなく、もっと積極的に子どもの行動を認め、褒める機会を意図的に創る事を大切にしたいものです。そのために、先ず一人ひとりの子どもにじっくり寄り添い、表面に現れている行動にとらわれず、その原因や理由を見つめ、子どもの内面をしっかりと理解する事が大切です。

自分で考え、選択し、決定した行動を受け入れられ、認められ、褒められる経験の蓄積が、自己肯定感、自信を高め、ひいては自立心につながると考えます。

私たち教師は、日頃から心にゆとりを持って子どもたちに接し、ありのままの姿を受け止めながら、その変化と内面の変化を敏感に感じ取って、柔軟に対応する事を求められていると思います。